

質疑応答

質問 1

LTD 話し合い学習法は効果があるとのことでしたが、少し信じられない部分があります。

古庄先生ご自身は LTD 話し合い学習法に取り組むに当たって、「本当に学生が予習してくるだろうか」「ミーティングが成り立つだろうか」といった懸念があったとおっしゃっていました。私はこの学習法をまだ行っていませんが、先生と同じようなことを心配していました。先生のお話を聞いた今でも、それは変わりません。

学生がこの学習法による授業を体験して面白さを感じれば、もっと面白くするために、しっかり予習をするようになるだろうとは思いますが、ただ、そういう良いサイクルにならないければ、授業はすぐに崩壊してしまうのではないのでしょうか。

回答(古庄) 私は、LTD 話し合い学習法に取り組もうとして安永先生の本を読み、「何か難しそうだな」と、一瞬ためらいました。ちょうどその頃、関田先生に別件でメールを送る機会があったのですが、メールに、「授業に LTD 話し合い学習法を取り入れようと考えているが、踏み切りがつかえません」と書き添えたところ、返信で「きつとうまくいきますから、第一歩を踏み出してください」と励まされました。関田先生の一言が、私の背中を押してくれたのです。

「今の学生は学習意欲が落ちている」とよく言われます。確かに、そういう面もあるかもしれませんが、ただ、学生に合った学習法であれば、学習意欲は高められるはずですが。私は、LTD 話し合い学習法による授業を通して、学生には意欲も可能性もあることを実感しました。本当に、驚くほど良いレポートを書いてくるからです。上野先生も、協同学習に取り組むには教師が学生を信じるのが大切であるとおっしゃっていましたが、私も全くそう思います。

先ほどお話ししたように、LTD 話し合い学習法を始める前は、私も授業崩壊が心配でした。しかし、始めて間もなく、そうした心配は解消されました。どの学生もしっかり予習をしてきたからです。「LTD 過程プラン」の手順通りに授業を進めれば、「全員で頑張る学習しよう」という、いわば協同の力が働いて、学生は予習をしてくると思います。

質問 2

本校も医療系の専門学校ですから実習の授業があるのですが、マンパワー不足を感じています。上野先生のお話を伺って、ジグソー学習法を実習に取り入れたいと感じました。そこで、二つお聞きしたいと思います。

一つは、教師役の学生の決め方について。もう一つは、教師役の学生に対する教師の指導にかかる時間についてです。

回答(上野) まず、教師役の学生の決め方ですが、特に定めていません。どの学生も何らかの技術課題について教師役を務めるからです。

看護実習では、一つのベッドを学生 4 人一組のグループが使いますが、課題が四つあれば、一人が 1 課題ずつ教師役をすることになります。実際の課題はもっと多いため、実習期間中に全員

が何回も教師役を務めます。

次に、教師役の学生への指導時間についてお答えします。ジグソー学習法では、学生も教師も、時間外の努力が求められます。

授業中に練習時間をとりますが、それだけでなく、学生は自主的に時間をつくって練習しています。練習を始めてから、教師役としてデモンストレーションができるかどうかを評価するまでの期間は、10日～2週間ほど設けています。学生がデモンストレーションで説明する項目は「意義と目的」「必要物品」「手順と根拠」など複数ありますが、1項目の練習に30分～1時間ほどかかります。例えば、練習する学生が20人いて、一人が1項目を練習するのに1時間かかるとしたら、20人の学生を教師が個別に評価・指導する場合も一人当たり1時間ですので、一人の教師が指導する時間は20時間に及びます。ですから、どの教師もジグソー学習法に対する強い意気込みを持ち、協力し合う必要があります。学生だけの力では、この学習法は成立しないと思います。

質問3

本日のシンポジウムでは4人の先生方が、一人は「初年次教育と協同教育をつなぐ」ための「why」について、3人は「how」についてお話してくださいました。「what」に当たる内容はありませんでしたが、これはなぜでしょうか。

私は、ソフトウェア工学を学んだためか、「what」、何のためにというところがとても気になります。

「how」についてのお話で示してくださったような授業を行うためには、明確な問題設定が必要です。先生方には「what」は明らかであると思いますが、誰もが先生方のように「what」を捉えてはいないと思いますし、「what」を探すことは、教師にとってかなり大変なのではないだろうかとも思います。

回答(安永) 趣旨説明でもお話ししたように、今回のシンポジウムの目的は、活動性の高い授業をいかにつくるか、授業の活動性をいかに高めるか、ということにあります。活動性が高くなった時に授業がどこへ向かうのかは、それぞれの学校の理念や教育目標などから導き出されるべきであると考えています。

どの先生方も、ご自分の専門性の何かを学生に伝えたいと思うはずで、その時には、どの学習法が最もふさわしいかという発想で考えていただきたいと思います。

この会場には、小学校や中学校の先生も含めて、さまざまな専門領域の方がいらっしゃいます。先生方それぞれの領域に応じて学習法を選び、学生に伝えていくことになると思います。伝えるためにはいくつもの方法がありますが、方法だけを知るのではなく、学習法をトータルとしてどう見ていくべきかを考える必要があるはずで、その、どう見ていくべきかについて、最初に関田先生にご説明いただきました。

「what」は、先生方が何をするために、この学習法をどう使えば良いかというところで考えてくださいますと幸いです。

質問4

PBLは薬品と同じように、効果がある半面、副作用もあると聞いています。PBL教育は、大学はもちろん、中学校や小学校、幼稚園でも行われていますが、PBL教育を実施するに当たっては、各大学や諸機関がとても神経質になっているようです。そのため、それぞれの大学に教育機関を

設けて、PBL 教育について研究しているといいますが、日本歯科大学にも、そうした教育機関はあるのでしょうか。

回答(長田) 日本歯科大学新潟生命歯学部では PBL テュートリアルを導入する際、PBL テュートリアル教育委員会を設けました。導入時にどのようなワークショップを行うかといった規格を同委員会がつくったのです。

導入後は、同委員会はシナリオライターが書くシナリオを毎回チェックしています。シナリオには、なるべく学生に疑問を起こさせるような表現が求められるため、同委員会では、「もっと疑問が出てくるような表現に書き改めよう」などと議論しています。また、本学部で PBL テュートリアルを行っている三つの学年には、それぞれ PBL のコースディレクターがいます。そのコースディレクターは、すべて同委員会のメンバーです。

同委員会があるからこそ、今、本学部の PBL テュートリアルがうまく動いていると、私は思います。逆に言えば、同委員会のような組織がなければ、PBL テュートリアルを機能させるのは困難かもしれません。先ほどお話ししたように、多くの教師が力を合わせる必要がありますから、中心にはそれなりに大きな組織があることが重要です。

質問 5

最初に質問された方と同様、私も、学生が平均 4 時間半も予習をしてくることが信じられません。いや、1 年生に限れば、そういうこともあるだろうとは思いますが。ただ、私の経験では、学生は 1 年生の前期には学習意欲が高くても、そこからどんどん意欲を失っていくと思います。

古庄先生は、LTD 話し合い学習法による授業を 2 年生と 3 年生でも行われているそうなので、1 年生以外の学年での予習時間についても教えてくださいませんか。

もしも、2 年生と 3 年生の予習時間が 1 年生と比べて減っているのであれば、今後、どのように予習時間を増やそうとしているかもお聞かせください。

回答(古庄) 2010 年度、2 年生の前期で LTD 話し合い学習法による授業をした時は、平均予習時間は 5 時間を超えていました。ですから私は、2011 年度の 1 年生の平均予習時間が 4 時間半であるとわかった時、「やや少ないな」と感じました。

2011 年度の 3 年生については、予習時間を調べていません。ただ、かなりハードな課題を、量もたくさん出していますから、相当な時間をかけて予習をしているはずですよ。

どの学年にも、他の科目の授業を受けている時や授業と授業との間の休み時間を使って、LTD の学習課題を読み返したり、知識の統合や知識の適用を考えたりしているという学生はたくさんいます。もっとも、学生はそうした時間を予習時間には数えていないと思います。それをも数えたら、平均予習時間はさらに多くなるはずですよ。

学生がそれほど熱心に学習するようになったことは、正直、私もすぐには信じられませんでしたが。しかし今では、学習法次第で学生の学習意欲は教師の想像以上に伸ばせる、それだけの可能性を学生は秘めていると思うようになりました。